

藤原亮司写真展

「もう存在しないガザの日常」

ポ-アイ図書館ギャラリー展では、現代社会学部 社会防災学科 水本有香教授の企画による藤原亮司写真展「もう存在しないガザの日常」を展示しています。

カウンター前において、水本教授による関連書籍「ガザ地区で生きるということ、今ガザ地区で起きていることにふれるための本」を展示、オアシスゾーンのモニターでは関連動画を上映しています。

2024年11月11日(月)～11月28日(木)

神戸学院大学ポ-アイ図書館

ポ-アイ図書館入口ゲート横ギャラリー

藤原亮司写真展

「もう存在しないガザの日常」

2023年10月7日--。ガザを出たパレスチナ武装勢力によるイスラエル攻撃によって、イスラエル軍の侵攻が始まった。空爆、砲撃、地上部隊による攻撃。その報復は、戦闘員と市民の区別なく行われ、甚大な犠牲を今も生み続けている。

武装勢力によるイスラエル攻撃がおきてすぐ、わたしはガザの友人、サミール・スベータに電話をかけた。「イスラエル軍の侵攻は毎度のことだが、今回やつらは絶対に容赦はしないだろう」と、電話口で彼は言った。「これから、地獄が始まる」と。

そしていま、ガザは彼の予言どおりになっている。

衛星写真による解析では、今年9月末の時点でガザの建物の70パーセント以上が破壊されたという。イスラエル軍によって建物があった場所や道路は掘り返され、土がむき出した更地になった。すべての大学は破壊され、避難民が暮らす小中高の学校も、砲撃や爆破の対象となっている。病院や、テントが乱立する避難民キャンプも攻撃の対象になり、安全な場所はどこにもない。

その「どこにもない安全な場所」を求めて、人々はガザの中をさまよっている。自分や家族に訪れるかもしれない、「死の順番」を待ちながら。

わたしが何度も訪れ、かつて見慣れたはずのガザの風景はもう、どこにもない。

封鎖され、ガザを出る自由もない人々の暮らし。これまでも何度となく行われてきたイスラエル軍による空爆や侵攻、自由の制限。そんな暮らしの中で、子どもは大人になり、青年は中年になり、中年は老人になった。

繰り返される殺戮と、人間の尊厳の破壊。自らの未来を、自身で選択することも許されない。

それでも、そこには人々の日常があった。そしてこの侵攻のさなかでも、それは極めて不自由な形ではあるが、確かに続いている。

藤原亮司（ジャパンプレス）



カウンター前 関連書籍展示



パレスチナと ガザ

藤原亮司『ガザの空の下

-それでも明日は来るし人は生きる』 dZERO

ポ-アイ図書館ギャラリー展では 9 枚の写真を展示しています。

①



① 一時停戦中に破壊された自宅に戻り、使えるものを探しに来た姉妹。ガザ区トゥッハー

②



② 避難所となっていた学校の教室には大人数の親族一同で避難。女性と子どもは夜に寝て、男性は昼間眠る。ガザ市

③



③ 2009 年の侵攻時、家に押し入ったイスラエル兵に目の前で父と弟を撃ち殺された少年ファウジー。ガザ地区ザイトゥーン

④



④ 糖尿病患者の多いガザで、人工透析を受ける患者。彼らが通っていたシファ病院はこの侵攻で攻撃され、多大な被害を受けた。ガザ市

⑤



⑤ 大人と変わらない手慣れた手つきで家業の精肉店を手伝う兄弟。ガザ地区ハンユニス

⑥



⑥ ロバの荷車に乗せてもらい遊ぶ子どもたち。ガザ地区ラファ

⑦



⑦ 2014 年のイスラエル軍侵攻により殺された人たちの合同葬儀。メッカの方角を向いて祈る。ガザ地区ラファ

⑧



⑧ 映画館もなく、電気も一日に 4 時間ほどしか通じなかった、娯楽のないガザ。夏には日暮れまでビーチは人で賑わっていた。ガザ市

9



⑨ サミール・スベーター家とその甥や姪。今回の侵攻でこの一家は家を失った。ガザ地区シュジャイヤ

Samir Subeta and his family, including his niece and nephew. The family lost their home in the recent invasion. Shujaiya, Gaza Strip

オアシスゾーン 動画上映



ファウジーと2人の幼い娘
(2022年12月)

「炭化した7つのナス」目の前で父親と弟を殺されたファウジー
(11分54秒)

崩れた玄関を分け入って部屋に入ると、ストーブの上には炭化したナスが7つ残され、朝食の支度をする家族の日常の名残を感じさせた。しかし、2009年1月5日の早朝、イスラエル兵が玄関のドアを叩いたとき、その家族の日常は途切れた。

『あいつらはいきなり、父さんを撃ち殺した』。目の前で父親と4歳の弟を撃ち殺された、ファウジー・アテウア・サムニ（当時15歳）は言った。母親と兄も撃たれ、重傷を負った。ファウジーと仲良かった友だちやいとこなども、7人が殺害された。

ガザ地区サイトゥーン地区にあるサムニ通りでは、その通り沿いに暮らすサムニ族21人が殺された。ここに「テロリスト」が潜んでいたからではなく、そこを進軍してゆくイスラエル軍の「安全の確保」のため、「クリーニング」された。

サムニ通りを訪ねると、いつもファウジーは瓦礫の陰からふらりと現れる。学校へは行かず、避難先の親戚宅からこへきて考え事をして過ごすと言った。

周囲では彼の幼いいとこたちが無邪気に笑って遊んでいる。その子どもたちも、親やきょうだいなどを失った。

彼らの姿を見やりながらファウジーは、「昼間はあんなふうには笑っているけど、夜になると泣き出したり、怖いことを思い出して暴れる子もいるんだ」。

15歳のファウジーはもう幼い子どものように、無邪気に遊んで忘れることはできない。瓦礫の陰に座り、父や弟、友人やいとこたちの死を思い続けることで、なんとか飲み込もうとしていた。

2022年12月。ファウジーから写真が送られてきた。そこには父親になったファウジーと2人の幼い娘が写っていた。家族を亡くした彼が、自分の家族を持って幸せに暮らしているのだと感慨がわいた。

しかし、昨年の侵攻での彼の自宅や農業をしている畑があるサイトゥーン地区は、真っ先にイスラエル軍部隊の侵攻ルートとなった。衛星写真で見ると、そのあたり一帯は破壊され、家も畑ももはや見当たらず、連絡も取れない。

ファウジーとその家族の消息は、いまは分からない。

ギャラリー展 展示



SeaScape

第34号 2024年11月発行

発行・編集 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス図書館

〒650-8586 神戸市中央区港島1丁目1番3